

# 鞍馬寺と門前住人

小 谷 利 明

## はじめに

本稿の対象とする鞍馬寺と門前村落は、現在の京都市左京区鞍馬本町にあたる。鞍馬寺に関する研究としては、橋川正氏の『鞍馬寺史』が鞍馬寺創建から大正期に至るまでの時期を実証的に考察され、それに含まれる多数の史料とともに鞍馬寺研究の中心的な役割を果たしている。また、鞍馬村住人に関しては、井上頼寿氏の『京都古習志』がもっとも詳しい。鞍馬寺は橋川氏の研究にあるようにひじょうに多面的な要素を持つ寺院であるが、史料的な制約もあり、その後十分な検討がされたいとはいえない<sup>①</sup>。筆者の関心は論題にあるごとく鞍馬寺と鞍

馬寺の門前に発達した村落及びその住人との関係にある。これは鞍馬住人を鞍馬寺の寺院構造に含めて考察することであり、これにより橋川氏がされた鞍馬寺研究を別の側面から発展させたいと考えるものである。このことは経済的にみても、鞍馬寺というほとんど鞍馬寺域内しか所領を持たなかった寺院にとつて<sup>②</sup>、その門前村落住人の経済活動が大きな比重を占めていることは間違いない、更に中世後期の鞍馬寺信仰の発展もこれら住人との関係も含めて考察されねばならない。

この問題を考えるにあたって、井上氏が考察された近世の鞍馬村七仲間が問題となる。七仲間とは大惣・名衆・宿直・僧達・大夫・大工・脇仲間のことである。井

上氏はこれら仲間をそれぞれ解説されているが、歴史的な展開の上で論述されているわけではないので改めてここで各仲間について検討する。問題はこれら仲間をいかに中世までさかのぼらせるかにあるが、史料上の制約のため大惣仲間を中心に検討することになることを断っておく。

## 一、中世における鞍馬住人の様相

### ① 両講衆中と大惣仲間

大惣仲間は現在も竹伐会で法師姿で竹を伐るなど一般によく知られた仲間である。近世では、七仲間のうち大年寄を決めるにあたって、名衆・宿直のうち一人、地下三在地（大惣）のうち一人を選ぶことが貞亨元年（一六八四）に決められている<sup>③</sup>。このことなどからみても大惣仲間がいかに村内でも有力な仲間であったかが知られる。大惣仲間が中世において検証できるのは南北朝期からである。

応安五年（一三七二）十月、上賀茂社と貴船社との間で界相論がおこなわれ、この月北朝はこれを上賀茂社の

領有と裁決した<sup>④</sup>。この相論は単に本社・末社間の対立とみられたが、この勅裁に対し、今度は鞍馬寺が異論を呈した<sup>⑤</sup>。相論は上賀茂社が寛仁二年（一〇一八）十一月二十五日付太政官符をはじめとする多数の証拠文書を提出したのに対して、鞍馬寺側は安和二年宣旨、嘉禎二年官符を提出したが、これは「或不帶正文、或非堺所見」といった状態で、鞍馬寺の敗訴となった。ところが、永和二年（一三七六）、鞍馬寺は安和二年宣旨の正文を提出、再び越訴した。この相論の対象地は貴船川以东の山地であったが、鞍馬寺からみた場合、鞍馬寺の所在する山の西側部分となり、容易く譲るわけにはいかないものであった。

この相論は永和五年（一三七九）正月二十八日付後円融天皇綸旨<sup>⑥</sup>においては、一旦は鞍馬寺の勝訴となるが、その数か月後の康暦元年九月五日に再び後円融天皇綸旨が発給され上賀茂社の主張が認められることになる。これによって、この相論は一樣の決着を見たものの、在地における対立は依然として残っていたようである。この年十一月、鞍馬住人と上賀茂社神人とが、貴船社の末社

鑑取社社前において乱闘し、上賀茂社人が鞍馬寺参詣人や周辺の鞍馬住人らを打ち止どめて、驚くことには貴船社の神宝を奪い取って、在家を破壊するに及んだのである。<sup>⑧</sup>

これら事件は、この地域の錯綜した領有関係を象徴するものであり、一元的な支配を成立させることはどの権門にも困難であったことを示している。

ところで、この堺相論は鞍馬住人が能動的に活動している状況がみてとれる最も早い次期の史料である。更に、この相論に関する中世の写とおもわれる文書が鞍馬村方文書にあり、<sup>⑨</sup>いかにこの相論が鞍馬住人に重要であったかがわかるのである。それは、康暦二年四月十三日付鞍馬寺住僧宛行状<sup>⑩</sup>からもみてとれる。

#### 宛行 両講内陣並公事等事

右件宛行者、両講上拾式人内陣末代可有参詣、其外者被停止畢。将又、免除之趣者、境相論之大訴忠勤之恩賞也。然間、人別之外於万雑公事者不可有其弁、為向後宛状如件。

康暦二年四月十三日

鞍馬寺と門前住人

#### 権別当法印寛雅判

##### 執行法印快善判

(以下十名署名略)

この文書は、鞍馬寺が両講に対して先の「境相論之大訴忠勤之恩賞」として、両講の年寄十二人の末代内陣をゆるすとともに、鞍馬村住人全員の万雑公事を免除したものである。この両講とは両講衆中と呼ばれ、後述するように近世の大惣仲間のことと考えられる。このことから、先の堺相論に鞍馬住人が積極的に参加していたことが知られるのである。堺相論は敗訴し、住人の生産活動の場は狭められたものの両講衆中及び住人たちは大きな権利を得ることに成功した。

ところでここでひとつ重要なことは、中世において鞍馬寺が近世の大惣仲間を「両講衆中」という法会集団を指す言葉で呼んでいることである。これは、両講衆中||大惣仲間が鞍馬寺の法会体系に組み込まれていたことを意味するからである。

彼らが積極的にこの相論に参加したのは、林業を中心にその生活がなりたっているからであり、その意味では

全く当然のことといえる。鞍馬における山林所有の実態

についてはほとんどわからないが、大きくいって青蓮院

領(名衆仲間系)、鞍馬寺領に分かれ、このほかに、惣

有、私有があつたと考えられる。

惣有に関しては、応仁二年(一四六八)十二月九日付  
山国惣庄山地売券<sup>⑧</sup>から、山国惣庄が「ハイタカ山、タカ  
セ、ツケワリ、ツサ谷、ハタカ谷」の五所を鞍馬地下  
(この場合大惣仲間をさす)に売却しており、惣有山の  
拡大が知られる。また応仁三年四月十三日付室町幕府奉  
行人奉書<sup>⑨</sup>によれば、鞍馬寺の本堂後山の尾に関して、鞍  
馬寺と地下が相論している。この相論は青蓮院によつ  
て、次のような裁許がなされた。

今度就山林相論事、寺家と地下儀候間、自両講衆中  
毎年直ニ可被申上候。然者在家えも万直ニ可被仰付  
候。此趣可被存知候。謹言。

文明元

七月二日

目代

忠助判<sup>⑩</sup>

鞍馬寺山林相論事。早任去十一日令旨之旨、可專領

地。敢不可令違乱之由、依別当前大僧正御房仰下知  
如件。

文明元年七月十四日 目代権少僧都判<sup>⑪</sup>

当寺両講衆中

右の二通の文書から、この相論は地下の勝訴となつた  
ことがわかる。これにより地下はこの山に関しては鞍馬  
寺の支配を排除することができたものの、「在家えも万  
直ニ可被仰付候」とあるように、惣有山に対する山役賦  
課権を青蓮院は有していたと考えられる。このことは惣  
有山、私有山も広義の青蓮院領であつたことを意味す  
る。ここで一つ注意を要するのは「地下」とはなにを対  
象に呼んでいるかについてである。一般に「地下」とは、  
鞍馬住人全員を呼ぶ場合と大惣仲間を対象とする場合の  
二通りがあつた。康暦二年の万雑公事免除は次章で見  
るように住人全員を対象としていたと判断できるが、こ  
に見える本堂後山尾とは阿蔵谷のことと考えられ、大惣  
の惣有山と考えられる。この山は、明応三年(一四九  
四)四月八日付細川政元禁制が鞍馬寺宛に出されている  
が、この文書の中世に写されたと考える文書が「下在地

大惣仲間文書」に残されており中世の段階で所有していたと考えられる。

つぎに両講衆中の構成について見ておきたい。但しこれについては、中世の史料からはほとんど知ることができない。近世の大惣仲間については、下在地・中在地・上在地大惣仲間という三つの仲間にわかれていた。これは鞍馬村が三村に分かれていることからであったが、他の仲間については分立は認められない。

ところで、村の分立の時期であるが、これは少なくとも中世後期には完成していたようである。康正二年（一四五六）十月十四日付善蔵竹原売券には「在所下在地、中在地之庵ノ脇也」とあり、また、天文十五年（一五四六）霜月二日付又四郎畠山売券では、「鞍馬上在地岩神向在之」とあることからである。そして善蔵竹原売券にみえる買主が「中在地」とあることから、すでに近世の仲間組織の原形はできていたと考えられる。ここに中世において両講衆中という二つの法会集団からなるものと三つの村落単位からなる地下惣中がおなじ構成員でありながら、同時に存在したことがわかる。先の鞍馬寺と地

下との山林相論で青蓮院が両講衆中に宛た文書を発結していることからみて、地下惣中の上部集団が両講衆中であったとみられる。そして、両講衆中は青蓮院においても「当寺両講衆中」とあるように鞍馬寺の寺院構造に含まれる存在として認識されていることを再度記しておきたい。ここで問題となるのは、中世では両講衆中として把握されていた集団が近世において大惣仲間として青蓮院や鞍馬寺に把握されるに至る経過である。このことについては、次章で述べるとして、近世の仲間組織が中世までさかのぼることを論証したところで、近世史料から大惣仲間の組織について見ておくことにする。

#### （前略）

#### 心経会之事

一、十月十八日本尊観音食堂え出仕、心経会座

#### （中略）

#### 大師講座之事

一、十一月二四日日本尊大師食堂出仕、大師講座

#### （中略）

右、心経会座大師講座両講共に食堂え出仕候て大瓶

酒を備、儀式相勤候。

一、男子致出生候年之九月十七日、米売斗座入出ス。

一、同年両座共ニ本当役米七斗仲間え出之。

一、十七歳 仲間入振舞仕候。

一、十八歳 名酒振舞仕候。

一、中老成 其座年寄中老様へ酒振仕候。(舞闘力)

一、年寄成 其座年寄十人え振仕候

一、三和尚成 白米一斗仲間え振仕候

一、称講成 大惣四十人、大將座四人、職事座

四人、以上仲間四十八人振廻仕候

仲間座役年寄出世名之事

一、両座之頭人四人 称講

一、年寄十六人 講師

一、中老座二十人 法師

一、大將座より下 大

右、従往古座敷出世ニ而称号三和尚より上十二人

出世等ニ綿を掛申候事

一、青蓮院様御用 御役儀神事役両座之出仕等往

古赦免被為成、依之、上ニ刀を帶相勤候。

大惣山林之事

一、高峯山 大惣二十人年寄支配

一、はい高山 大惣四十人支配

一、かち合坂 三和尚迄十二人支配

一、壁地山 竹伐御神事料

(後略)

この史料から、大惣仲間は心経会・大師講の二座に分かれており、中世の両講衆中とはこの二座を指すものと思われる。大惣仲間の成員は、この二座のどちらかに入っており、年齢階梯によって座敷が決められていた。称講から三和尚までの十二人は、康暦二年に内陣を許された者たちと考えられ、称講以下年寄衆を老僧衆ともいい、年寄衆の下に中老衆がいた。このほか、「金堂入り」「本堂入り」「半出し」など若衆もその年齢に応じて分かれていたらしい。史料にみえる大將座・職事座については不明な点が多い。また、山支配についてもこの史料から座敷による山林支配であったことが知られるのである。

以上大惣仲間について中世にさかのぼらせ考察してきた。他の仲間については更に断片的な記述となるが以下順次みていきたい。

## ② 刀禰と名衆仲間

名衆仲間は大惣仲間が鞍馬寺の寺院構造に含まれたのとは対称的に由岐神社・八所大明神の神主職を持つ仲間である。これについて近世初頭の史料から、その構成を検討する。

鞍馬上一大明神八所大明神社職糺先機捷式目之条々  
一、為六人禰宜役可相勤事 刀禰職一期持。諸役無之。禰宜渡ニ祝酒白酒十杯豆腐五丁、味噌五合、尾頭有魚貳ツ、黒木壹束

一、為中膳六人神殿役廻持ニ可相勤事 但不浄之事於有之者其次ニ可相勤事、付無不浄を不浄有之と申事於有之者、兩大明神御罰各可蒙候事

一、刀禰成ニ衆中え出米六斗祝酒白酒十杯、豆腐五丁、味噌五合、尾頭有魚貳ツ、黒木一束一、二和尚成ニ出米五斗祝酒右ニ同  
一、中膳成ニ衆中え出米五斗

鞍馬寺と門前住人

祝酒右ニ同

一、神殿渡ニ祝酒右ニ同

右社家職可為一期候、若背此式目社役ニ付違乱煩申輩於有之者、永衆中を払其上御門跡様え納候名主職令改替、衆中之内器量之輩ニ可申付候、仍所定如件

青院様時代官

元和三年

十一月五日

蔡吉右衛門吉長判

隠岐駿河堯全判

渡辺善長延判。

名百姓惣中

この文書から名衆仲間の年寄は、刀禰・禰宜がおり、その下に中膳がいたことがわかる。そして名衆仲間とは、本来は名主職、百姓職を持つ集団であったことが知られるのである。このことから、名衆仲間とは本来名主仲間と呼ぶべきものと考えられる。そこでつぎの中世文書は名主仲間に関する史料と考えられる。

宛行鞍馬寺本名百姓職事

祢宜与三安宗

右当名主職者安宗相伝之地也。号訴人国元雖捧申状不帶一紙支証之間、不及御沙汰、於安宗者去延慶正和状分明也。早任正和寺務下知令領知、有限御公事等不可有懈怠状如件

觀応元年六月十五日

目代権律師良永判<sup>①</sup>

この文書は、鞍馬寺本名百姓職の相論について、青蓮院が裁許したものである。ここで百姓職を補任された安宗は禰宜とあるように、近世では名主仲間の年寄層に当たる。また、これら名主仲間の構成員が青蓮院によって補任されていることが注目できる。ここで正和寺務下知とあるように一般に名主職は青蓮院に補任されていたと考えられる。これについて近世史料からみると、享保十五年（一七三〇）七月に東叡山輪王寺が鞍馬寺の寺規二十条を定めた最後の条文に、「刀禰耆人者、其職御寺務ヨリ蒙御許容候故、御寺務之権威ニ相募、外百姓ヲ蔑ニ仕間敷候。」とあり、近世には刀禰のみが補任されるようになったことがみられる。このような青蓮院による諸職補任関係は、名主仲間特有の性格である。これは、名

主仲間が青蓮院領内の山仕事をする仲間であつたことによると考えられる。

### ③ 宿直仲間

井上氏によれば、宿直仲間は牛若丸に剣法を伝授した子孫という言伝えを持つ仲間で、「組頭は靱明神と鞍馬寺に関する事務を取扱」い、「青蓮院から宿直十名を青侍として召される」などの特質を持つ仲間としている。近世において宿直仲間の性格はこのようなものだが、中世からみた場合これらが本来的な性格であつたとは考えられない。次章でみる鞍馬寺騒動のなかで、宿直仲間の本来的特質がわかる史料がある。それは鞍馬寺僧が山下にあつて相論を起こし、青蓮院より裁許をうけた請文の条々の一条目である<sup>②</sup>。

これによれば、これら鞍馬寺僧が山下にいることが、宿直のようであるとされ、宿直同様に「毘沙門并札卷数以下」を諸旦那に賦ることを誓っている。このことから、宿直仲間とは、札などを旦那に賦ることが一つの特質であつたと考えられる。

また、「別本賦引付」によれば、天文十六年閏七月、



土倉の野洲井源次郎清助が、鞍馬寺山上山下板東人宿職を当知行として安堵されている。この史料は、鞍馬参詣人に関して地域分けされた宿があったことがわかり、鞍馬寺信仰の広がりから、このような施設が成立していたことがわかるのである。そして近世で宿直仲間と呼ばれたこれら住人は、おそらく中世においてはこの宿を経営していた者たちであったとみてよいだろう。かれらはこの宿を本拠として札を賦っていたと考えられる。宿直仲間が牛若丸信仰とかかわりを見るのは、札賦りとの関係であろう。武田信玄が鬼一法眼の虎の巻を受け取っているように、この虎の巻は毘沙門天の札とともに鞍馬寺信仰の重要な要素となっていた。宿直仲間はこの鬼一法眼伝説とつながることで札賦りをしたのであろう。この意味で宿直仲間は、鞍馬寺の信仰と財政をささえる大きな役割を持っていたと考えられる。

宿直仲間の以上の特質をみると、僧達仲間は先達と関係するのではないかと想像される。しかし、これについては史料がなく、わからない。僧達仲間の特質としてあげられるのは近世初頭、八瀬童子とともに青蓮院の駕輿

丁を勤めていることである。<sup>⑤</sup>このほか、太夫仲間・大工仲間・脇仲間については、中世については特筆すべき史料がない。

## 二、鞍馬寺騒動

元龜二年（一五七一）九月、織田信長による延暦寺焼き打ちは、末寺である鞍馬寺にとっても中世の終焉を意味していた。鞍馬は信長の蔵入地となり、山林は用木として伐られ、住人らは陣夫として使われることになる。<sup>⑥</sup>しかし、天正八年（一五八〇）六月、信長は鞍馬寺別当職を青蓮院に安堵し、<sup>⑦</sup>十年に及ぶ信長支配が終った。この近世社会に移行するなかで、青蓮院と鞍馬寺の関係も動揺し、鞍馬住人もこれに免れるものではなかったのである。

これはまず、天正十三年鞍馬寺執行代をはじめとする鞍馬寺衆徒から起こる。<sup>⑧</sup>これは、鞍馬寺の検断及び補任に関してであったが、鞍馬寺側が起請文を書き、謝罪したことで解決される。ここにみえる鞍馬寺僧は鞍馬寺の中でも上層に位置していたが、これから四年後の天正十

七年（一五八九）からは、鞍馬寺僧及び住人を含めた騒動が起こる。この年七月、秀吉は鞍馬寺寺僧の妻帯するものを追却するよう朱印状を出した。これはこの時期一般の寺院の綱紀肅正の一貫であるが、これから四年間、鞍馬寺の一部の寺僧と鞍馬住人を含めた相論に発展する。住人らの訴訟は、青蓮院に対する人夫役が重要な問題であつたらしい。これについて天正十七年九月十七日、豊臣秀長は、鞍馬百姓に以下の折紙を発給している。

今度鞍馬申分大納言様より浅弾・増右・民法へ被成御異見、悉相談候、可為如先規之旨候、然共毎月ニ中食を被遣廿式人宛人足青蓮院殿へ可被召遣ニ相定候、乍去他国へ者人足不可出之旨、堅御意候、為其兩人よりも如此候、恐々謹言、

九月十七日

加藤遠江守

光泰（花押）

足田右近大夫

就茂（花押）

鞍馬百姓中

なぜ秀長が京都及び近郊村落の問題に発言したのか、その権限があつたのかは、今後の課題となるが、これによつてこの月、「洛中之所司代以若州太守浅野小弼殿、被添玄以法印」とあり、京都所司代が前田玄以のほかに浅野長政が加わつた。この理由は「京ノ所司代玄以法印、今度クラマノ義失面目由」とあり、鞍馬問題がこれらの結果を生んだと考えられている。いづれにせよ青蓮院に対する人夫役賦課が問題となり、豊臣秀長までがこれに係るまでに至つたが、解決されずに所司代二員制となるのである。

鞍馬寺僧の訴訟は、秀吉朱印状に見られる妻帯僧との関係からであつたとみられる。享保十二年（一七二七）十月青蓮院宮御使鳥居小路大藏卿・大谷少進連署状によると、「天正十七年鞍馬寺妻帯之僧追布之事、秀吉公御朱印を以、青蓮院殿え被仰進候、依之、妻帯之僧可被追布之处、以御憐愍山下ニ被差置、宿直と申者ニ被成候、文禄年中寺僧地下非分之儀有之、被逐御吟味候処以誓紙御詫申上御有免被成置候、其節之誓紙于今有之候事」とあり、妻帯僧が宿直になつたことが知られるのである。

また、ここで注目されるのは、文禄元年（一五九二）十二月廿九日付で鞍馬地下と寺僧の詔状が同日付で出されたことである。このことから両者に連係があったことが想像されよう。

先年企非分訴訟、其以来及四年、御門跡様え従地下中出入ヲ相止、諸成物夫役以下一円無沙汰候事、併大和大納言様相背御意之旨といひ、彼是曲事之段今度被逐御糺明、可被仰付之由、致迷惑既各逐電仕候処、以御慈悲被成御赦免、被召返候儀忝次第候、然上向後少モ不存如在、諸事任御意御奉公可仕候、若構野心不議緩怠之儀御座候者、一類共ニ可被加御成敗候也、仍状如件

文禄元年一二月廿九日

良泉称講判

宝 藏 判

常幸称講判

徳 新 判

実谷称講判

常 徳 判

妙藏称講判

財 正 判

円 常 判

良 秀 判

福 寿 判

常 福 判

徳 行 判

鳥為少路殿様

この文書から、住人らは諸成物夫役以下を一切出さず、逐電すらしている。署名にみられるように両講の四人の称講とともに大部分が僧名を名のり、このほか刀禰・禰宜・神殿の名主仲間の年寄と大夫が職名で署判している。管見の範囲では、僧名を名乗るのは大惣仲間・僧達仲間であることから、宿直仲間・大工仲間・脇仲間などの署判がないことになる。しかしこの闘争は鞍馬住人の大部分が加わったと考えてよいだろう。これら住人の諸役軽減闘争は、信長による陣夫等によって人口の減少と村落の疲弊が彼らを駆り立てた原因といえる。事実、文禄三年（一五九四）一二月廿六日付鞍馬寺執行代

戸 祢 判 覚 藏 判

禰 宜 判 藏 宝 判

神 殿 判 実 円 判

大 夫 判 慶 藏 判

藏 福 判

長 福 判

上 宝 判

孝慶の名前で「雖為他国者僧達入申事」と題する文書が出され青蓮院の駕輿丁役を勤める僧達に十二名の他国人が加わっている。文中には先例ありとするが、やはり異例の処置だったといえよう。これは、他国から人をいれなければ、青蓮院の役儀が滞る状態であったためとられた処置と考えられる。

鞍馬寺僧の場合は、同日付で寺家御中宛に青蓮院へ取り成しを頼む文書を出す。そして文禄二年二月十一日に次の文書が出される。

#### 条々

一、相改坊号宿直次ニ罷成山下ニ在之上者、毘沙門并札卷数以下諸役以下諸壇方え相賦、交衆之望不可在之事。

一、向後奉対御門跡様、構野心不儀緩怠之儀、聊御座有間敷候。

一、諸事宿直次順寺役不有異儀事、

右、先年各企非分被訴訟、其以来既至旧冬四ヶ年之間 御門跡様へ一切出入を相止、不順寺役、諸事恣所行併大和大納言様御意之旨をも相背候条、

旁以曲事ニ被思召候間、今度在所可被追劫之由被仰出候、致迷惑以 准后様并御寺中御侘言申上候処、御赦免忝存候、自今以後相背右之旨候者、一類共ニ可被加御成敗候、為其親類中別紙ニ請状を以申上候、仍如件

下齊

文禄二年二月十一日

慶運判

松雲齊

牧齊

久印

長延判

宥全判

宥雅判

中將

侍從

重円判

慶祐判

康全判

宗見齊

休庵

慶祐判

宥澄判

鳥居小路大藏卿殿

参

右の文書にみえるように、九名の寺僧がこの相論に加わった。前章の宿直仲間のところで記したように、彼らは山下に居住して宿直なみに寺役を奉仕するように誓っている。ここで、大和大納言秀長の意に背いたことが記

されているように、この相論は住人たちの相論と時を同じくして始まったものとみられる。前章でみたように、住人たちは鞍馬寺の寺院構造に含まれており、両者の利害が一致するものがあつたのであろう。ここであえて推測がゆるされるなら、刀狩り令<sup>⑤</sup>による半僧半農の身分から百姓身分への定着と妻帯僧の僧身分の剥奪がそれにあたるのではないだろうか。

これにより鞍馬寺僧問題は解決をみるが、鞍馬住人らの人夫役問題は、慶長八年（一六〇三）板倉勝重裁許<sup>⑥</sup>まで持ち越されることになる。

慶長二十年正月八日鞍馬大惣仲間にあたる中老頭・若衆頭・大將衆らは、老僧宛に真行会・大師講の出来について託状<sup>⑦</sup>を出している。老僧は人夫役免除の特権をもっており、この意味でそれ以下のものたちの経済的負担は大きかったとみられる。その点、これらの訴訟の中心は彼らであつたのかもしれない。

結局この相論をとうして鞍馬住人が突き当たつた現実とはいかなるものであつたのであろう。「鞍馬門前役儀書付奉差上申候」と題する冊子の鞍馬全体にかんする条

目に、「地子は慶長年中より御寺中（鞍馬寺、筆者注）え村中相立申候<sup>⑧</sup>」とあり、康暦二年鞍馬寺と賀茂社の界相論の折に免除された特権はここに破棄されたのである。

しかし、年寄衆の内陣参詣は許されたようである。「毎年正月三日ハ四十人の年寄共衣を着し御内陣ハ入御たから物をいただき申候、又山之衆ハ八日ニ御いただき被成候、か様之式礼等も御座候、其上いにしへハ我々共祖先之もの共御朱印頂戴仕、御赦免之所にて御座候故、百姓之儀ニ御座候へ共、其時之式礼をちがへ不申、天下御長久之ためニおゐて礼つとめ申候」と後世の大惣称講が述べている。ここに一面中世との連続がみられるが「百姓之儀ニ御座候へ共」とする認識は、中世の段階と決定的に違うものであろう。

中世において「両講衆中」とよばれた大惣仲間は、近世以後その言葉は使用されなくなる。近世初頭では「地下惣中」が使われ、寛文年間頃から「大惣」の語が使われるようになる。「地下惣中」は前章でみたように、中世においてもみられたが、大惣仲間の別の側面である「両講衆中」という僧的身分は、その機構は残つたもの

の百姓身分の一元化とともに消滅したのである。

## おわりに

鞍馬騒動が一応の解決をみたものの鞍馬村の動揺は納まらなかったとみえ、元和四年（一六一八）十月十九日付板倉勝重書状写<sup>④</sup>には青蓮院の女院御所法事の人足役催促がみられ人足役の問題はいまだ尾をひいていた。

また、年末詳であるが、地下惣中の「惣ノかたまり法度」がつくられている<sup>⑤</sup>。

元和七年十月廿二日よりざしきをのき被申候衆、今日より寺家之堂あんふろへ一円ニよせ申間敷候、同となりあたりおやこニおひて一切火のとりかわしも申間敷候、此衆不慮ニ死雖被申候とも、寺あん・同惣寺ノ坊主衆・同おやこ衆ニおひて一人も出入申間敷候、仍而為其惣ノかたまり法度之状如件

### 地下惣中

道西称講	常満
来徳称講	常清
常久称講	道徳

妙藏称講 覚藏

良市 乗慶

行徳 蔵福

良満 性林

宝常 蔵徳

道覚 良福

実円 行祐

福円 乗正

蔵見 乗林

福行 常真

良善 良見

この法度が、いかなる理由で取り決めたか不明であるが、座敷から退いたものに対する徹底的な排除をみるこ  
とができる。これによって「惣ノかたまり」を行なわね  
ばならぬほど地下惣中は追い込まれていたのである。

寛永六年（一六二九）六月には、地下年寄の一期持ち  
が確認され、貞享元年（一六八四）三月には鞍馬村の大  
年寄がさだめられ、このころから大惣年寄が称講と署名  
する例も少なくなっていくのである。

以上、鞍馬寺と門前住人について中世から近世初頭にかけて、鞍馬住人の身分的な関係を通していくつかの点を考察してきた。中世寺院と村落の関係については、すでにいくつかの論考があるものの具体的にかける点もあり、本稿も十分意を尽くしたものはならなかったが、身分的な点でいくらか展望できたと思う。鞍馬住人の問題は、これ以後も検討されねばならない点もあり、また京都近郊農村の特色である村内に町が成立することなど、村の自治を考える点で重要な問題となる。これらの問題は後日別稿で論じることしたい。

#### 註

- ① このほか、鞍馬寺に関するものとしては西口順子氏「無動寺蔵本鞍馬寺縁起」「史窓」25号、拙稿「中世後期鞍馬街道五ヶ村の領有関係と地域結合」「京都市史編さん通信」一九四〜一九六号、及び『史料京都の歴史』左京区編鞍馬村を参照されたい。なお、本論文で利用した「大惣仲間文書」「下在地大惣仲間文書」に関しては同書文書目録の番号を参考に上げておく。

- ② 鞍馬寺は文明年間讃岐国宇足郡二村郷を領有しているが（鞍馬寺蔵鞍馬寺文書）、このほかの荘園については不明である。いずれにせよ、荘園を多数持つ大寺院であったわ

けではない。

- ③ 「華頂要略」門主伝第二十六。  
④ 『統史愚抄』応安五年十月二十五日条。  
⑤ 永和二年十一月十九日記録所注進状「壬生家文書」一五三号、及び「下在地大惣仲間文書」A111。  
⑥ 「壬生家文書」一五一四号、「大惣仲間文書」新A111。  
⑦ 「壬生家文書」一五一五号、「大惣仲間文書」新A111。  
⑧ 「花營三代記」康暦元年十一月一日条。  
⑨ 注⑤⑦。  
⑩ 京都府立総合資料館本「華頂要略」卷七十四鞍馬寺雜記第一（以下全て府立資料館本である）。  
⑪ 「大惣仲間文書」B111。  
⑫ 鞍馬寺蔵「鞍馬寺文書」。  
⑬ ⑭ 注⑩史料。  
⑮ 「同文書」A112。  
⑯ ⑰ 「松本浄一家文書」なお、『史料京都の歴史』左京区編文書解説を参照されたい。  
⑱ 近世では、大惣の分家は、大惣の年寄にはなれず、僧名も名乗っていない。  
⑲ ⑳ 注⑩史料。  
㉑ 橋川氏前掲書。  
㉒ 注⑩史料、なお全文は注㉓史料と同じ。

- ②4 「善光寺大勸進文書」『大日本史料』10—8。  
 ②5 「大惣仲間文書」AⅡ—1、『史料京都の歴史』左京区

編。

- ②6 慶長八年十一月付鳥居少路經孝法印覚「華頂要略」巻七  
 十三鞍馬寺之記。

- ②7 ②8 注⑩史料。

- ②9 「青蓮院文書」。

- ③0 「下在地大惣仲間文書」AⅠ—8。

- ③1 『鹿苑日録』天正十七年九月二十五日条。

- ③2 『多門院日記』天正十七年十月八日条。

- ③3 「華頂要略」附録三十三。

- ③4 ③5 注⑩史料。

- ③7 注②史料、藤木久志氏『豊臣平和令と戦国社会』P111）  
 3。

- ③8 注⑩史料。

- ③9 「大惣仲間文書」AⅡ—12。

- ④0 「大惣仲間文書」GⅠ—2。

- ④1 「大惣仲間文書」CⅠ—35。

- ④2 「大惣仲間文書」AⅠ—6。

- ④3 「大惣仲間文書」AⅡ—11。

- ④4 注⑩史料。

- ④5 注③史料。

- ④6 筆者の百姓身分に関する基本的な考え方は、「多元的身  
 分関係と私領没収権——鎌倉時代後期の村落上層民について

い。――（『佛教大学大学院研究紀要』第15号）を参照された